



## デフリンピック支援と共生社会の推進について



スポーツ庁のHPなどによれば、「デフリンピック」は4年に一度、世界的規模で行われる聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会であり、「デフリンピック夏季大会」が2025年、日本での開催は初めてとなり、東京で開催されます。本大会の開催期間は11月15日から26日までの12日間で、1924年の第1回大会から数えて、100周年の記念すべき大会となります。

デフリンピックは英語の「Deaf」（聞こえない人）と「Olympics」を掛け合わせたもので、オリンピック・パラリンピックと同様、4年に一度夏と冬の大会が2年毎に開かれます。

デフリンピックではコミュニケーションの全てが国際手話で行われ、競技はスタートの音や審判の声による合図を視覚的に工夫するなど、情報格差の解消以外はオリンピックと同じルールで運営されます。なお、パラリンピックには聞こえない人のカテゴリーはなく、聴覚のみの障害では出場できません。

デフスポーツはパラスポーツ全体でも社会的関心が低く、本大会はデフスポーツの魅力の発信、人や社会とデフスポーツ・デフアスリートをつなぐ機会として期待されています。

開催計画では音の聞こえる人とそうでない人が共同して大会を開催していくことで、コミュニケーションや情報バリアフリーを推進し、一歩進んだ共生社会の姿を示していくとしています。

本大会には80の国と地域から4,000人を超える選手の参加が期待され、昨

年の東京パラリンピックとほぼ同規模となるようです。しかしながら認知度は大変低く、2021年日本財団の認知度調査によると、パラリンピックは97.9%に対し、デフリンピックは16.3%という結果です。

聞こえない選手は音に反応できないので、視覚で補いプレーします。聞こえない選手は視野が広く横の動きに対する動体視力も良いという研究結果もあります。

一方、聞こえないことが体力や技術力に影響を及ぼし、競技レベルを下げている実態があります。筑波大学斎藤まゆみ教授が難聴者を対象にした調査によると、

1. 幼少期から様々な遊びや運動を経験できていない。
2. 専門的な競技指導が受けられない、ことが分かっています。

同教授は「コミュニケーションが壁となり、遊んだり、スポーツをしたりする機会が身近な環境で保障されていないことが、聞こえない人の競技力向上の妨げになっている」と指摘しています。

聞こえない人はコミュニケーションがスムーズに進まないとき、聞こえる人から少なからず面倒くさがられる経験をしています。そのため「相手に嫌われないよう」に、わかったふりをして、周りに合わせてしまう。そうすると、聞こえる人も分かっていると勘違いしてしまう。この小さなずれの積み重ねが、聞こえない人の潜在能力を引き出せない要因となっているようです。

デフリンピックの開催が聞こえない人への理解が進み、スポーツを含めた聴覚障がい者能力向上への環境整備が進むことを期待します。

以下、知事並びに教育長へ質問します。

1. 聴覚障がい者に対する理解を促進するうえで、日本で初めて開催されるデフリンピックは、大きな契機になると考えます。デフリンピックに対する認識について知事の見解とその認知度向上にどのように取り組んでいくのか伺います。
2. 昨年5月、障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法が施行されました。県民が利用する場所における情報バリアフリーを推進

していく必要があります。現状の取り組みと、デフリンピックを見据えた今後の取り組みについて、知事の見解をお聞かせ下さい。

3. 教育現場やスポーツ部局、福祉部局と連携し、デフアスリートと交流する機会や手話に関する情報の提供を通じて、共生社会実現に向けた啓発を進めるべきと考えます。どのように取り組むのか、知事に伺います。

また、共生社会の実現に当たっては、学校教育段階での取り組みも重要であると考えますが、聴覚特別支援学校では共生社会実現に向け、どのような取り組みが行われているのか、教育長にお尋ねします。

4. 障がいの有無や種別を問わず、参加できるスポーツやイベントを増やしていく機運は、地域の共生や多様性を深めていきます。聴覚障がい者をはじめとした障がい者が、スポーツや文化芸術に親しめるよう、県はどのように取り組んでおられるのか。また、今後の取り組みについて、知事に伺います。

#### 【服部知事の答弁】

##### ① デフリンピックに対する認識と認知度向上について

デフリンピックは、参加選手が聴覚障がい者であるため、スタートの合図を音ではなくランプや旗を使って伝えることや、参加選手は全員が国際手話を使いコミュニケーションをとること、選手への拍手は手をたたくのではなく、両手を挙げて、ひらひらと揺らす手話を使うなどの特徴があります。

県民の皆様がデフリンピックを観戦し、こうした特徴を知っていただくことは、聴覚障がい者への理解を深める一助となるものと考えます。

県内には、昨年5月にブラジルで開催されたデフリンピックバドミントン競技において銀メダルを獲得した選手や、デフサッカーの日本代表に選出されている選手がいらっしゃる。

こうした選手の情報を SNS やホームページで積極的に発信し、その活躍を広く県民の皆さまに周知することにより、2年後に控えたデフリンピックの認知度向上を図ってまいります。

##### ② 聴覚障がいのある方の情報バリアフリーについて

県では、現在、聴覚障がいのある方に対し、知事会見において同時手話通訳

を行うとともに、必要に応じて、講演会やセミナーに手話通訳者を配置しています。また、要約筆記者の養成や派遣事業を実施しています。

併せて、健康や災害といった生活関連情報を手話や字幕を使用した動画等により聴覚障がいのある方に提供する聴覚障害者センターの運営を支援しています。

また、今議会において、ろう者が手話を使い、安心して生活できる社会の実現のため、手話言語条例を提案させていただいています。

今後、この条例に基づき、手話の普及やろう者の意思疎通支援のため手話通訳者養成事業の充実に取り組んでまいります。

デフリンピック東京大会では、障がいのある人とない人との交流を通して、聴覚障がいへの理解が深まり、手話や要約筆記などへの関心が高まることが期待されます。

大会の開催に向け、手話の普及や手話通訳者の養成等にしっかりと取り組み、聴覚障がいのある方の情報バリアフリーを推進したいと考えています。

### ③ 県民がデフアスリートと交流する機会や手話に関する情報の提供について

県民スポーツ大会をはじめ、県が実施しているスポーツイベントにおいて、今後、県民の皆様に様々なデフスポーツのルールといった競技の特徴、応援の仕方などを紹介するとともに、デフアスリートと一緒にデフスポーツを体験していただく機会を提供してまいります。

手話に関する情報提供については、先ほど述べましたとおり、手話言語条例を契機に、県民の皆様に手話を御理解いただくため、県のホームページやSNSなどさまざまな広報媒体を用いて、発信していきたいと考えています。

また、多くの県民の方々に手話を身近に感じていただけるよう、地域で手話の普及に取り組まれている手話サークルの活動なども発信してまいります。

今後とも、これらの取り組みを通じて、共生社会の実現に向けた啓発を進めてまいります。

### ④ 障がいのある方がスポーツや文化芸術に親しめる取り組みについて

県では、

◆車いすテニスやボッチャなどのスポーツ教室の開催

- ◆クローバープラザやアクション福岡などにおいてパラスポーツ用具の貸し出し
- ◆県内の各地で活動する選手が一堂に会する「福岡県障がい者スポーツ大会」の開催

など、障がいのある方が気軽にスポーツを楽しんでいただくための取り組みを行っています。

また、

- ◆「障がい児者美術展」や、障がいのある方によるアートライブやダンスパフォーマンスなどを発表する「ツナガルアートフェスティバル FUKUOKA」の開催

- ◆特別支援学校におけるプロの音楽家による演奏会の開催

◆知的障がいのある方を対象とした、声をあげて体を動かして楽しむことができるクラシックコンサートの開催

など、障がいのある方が文化芸術を身近に感じていただくための取り組みを行っています。

今後もこれらの取り組みを通じて、障がいのある方がスポーツや文化芸術に親しむことができるよう、しっかり取り組んでまいります。

## 【吉田教育長の答弁】

### 共生社会実現に向けた取り組みについて

聴覚特別支援学校では、障がいのある者とない者との触れ合い、共に活動する学習として、地元の小中・高等学校や地域の方々との交流を図っており、体育大会への相互参加や手話講座等を実施しています。

また、今年度からは、スポーツ局と連携し、特別支援学校を拠点として、小中・高等学校の児童生徒とともにスポーツを楽しむ福岡県パラスポーツ交流会を実施しています。

これらの取り組みは、障がいの有無にかかわらず、互いを尊重し、支え合う気持ちを醸成する機会となっているところであり、共生社会の実現に向け、今後も積極的に実施してまいります。